

笹舟作りは川作り 百石幼稚園（青森県上北郡）

【5歳児】

「科学する心を育てる」とは、

① 幼児が物事に出合えること

② 共に出会いを受けとめ、なぜ？なに？を共有できる保育者のかかわりがあること。

③ なぜ？なに？の出来事を実体験でき、幼児の原体験となること

と考えて実践をした。

5歳児が楽しんだ“川で遊ぶ様子が描かれた絵本”の中に、笹舟を作る場面が登場する。当町の川は河口で、深く流れも早いこと、農業廃水も混入し、川遊びに適当でないことから、川で遊ぶという体験を実際に行うことは難しい。しかし、絵本の中で「川遊び」を知り、その中で表れる疑問や興味を、身近なもので実体験することができないだろうか考えた。そして、「この絵本のなかにあることで、幼稚園でできることはないか？」という疑問を子どもたちへ投げかけたところ、「石拾い、川作り、岩滑り（滑り台を使って）、ジャンプ、笹舟作り」など様々な答えが返ってきた。そこですぐ園庭へ出て、子どもたちの意見を実行することにした。偶然にも草花遊び用の笹が環境にあったので、早速笹舟作りが始まった。

事例1：笹舟作り ①②③ C=幼児

園庭にあった笹は採取して時間が経っていたので、乾いて思うように加工できなかった。

「古い笹はぱりぱりでだめだ」<気付き>

C：「新しいのを探しにいこう」<工夫>

と子どもから声があがり、園庭の奥の林へ笹を探しに行った。笹があり「友達の分」と言って、たくさん採った。新しい笹で笹舟作りを行ったが、簡単にはいかず、何度も挑戦していた。

次の日、朝から「また笹舟を作りたい」と張り切ってきた。

C：うまく作れるように絵本を持って園庭へ出た。<情報の活用①>

絵本を見ながら、一生懸命作っているうちに、だんだん上手になっていった。

やってみてできなかった体験



事例2：笹舟を本物の川に流そう

C：「笹舟、本物の川に流そうね」<興味の転換>

という話になり、保育者も「そうだね」と受け止めた。

そして、「今日はもう時間がないので、笹舟を流すには、どうしたらいいのか、明日みんなで話をしたいと思います。家でも考えてきてください」保育者は問題を提起②し、その日を終えた。

次の日、朝から早速クラスで話し合いが始まった。

C：「水に浮かべる」

C：「浮かべるだけでは流れないから、うちわで扇いだらいい」<知識・考え>

C：「板に水を流せば川になる」<考え・工夫>という意見が出た。

C：「川はどうして流れるんだろうね」<疑問・気付き>

と疑問を発表し、流れについて考えることになった。

C：「山の上からとか雨が降ったら、川ができる」<知識>

C：「坂になっていたら川になる」<知識・考え>

という意見が出て、一同納得した様子であった。

そこで保育者は「外に行って、流してみようか」と提案<展開③>し、それぞれが外に出て、興味をもつ方法で「笹舟流し」を始める。

板で川を作るグループ

川を作るために、どうやって板を坂にするか、A児が先頭になって考えていた。「用務員のおじさんに板をもらって、坂を作ればいい」ということになり、子どもなりに説明し、板を準備してもらった。

① 砂場の縁に板をかけて坂を作った。B児は板の上を笹舟を持って動かし、流れたと喜んでいった。

実際に板を置いたことで、平坦な板の上では水が溜まらず流れが出来ないことに気付いた。

C：板に縁を付けたい<工夫・知識>

と考えていた様子だった。用務員が「くぎで打って他の板を止めなければ、縁はできないよ」

と言ったことで、縁を作るのは諦めた様子だった。

やってみてできなかった体験

そして、興味は、いかに長く「板の川」を作るかに変化し、園庭を横切るように次々と板を並べ始めた。＜興味の転換＞板が無くなると、土を掘って「川」を作ることにしたようで、他児も加わって、土を掘り始めた。ちょうど、遊具の近くで、土は踏み固められており、

C：「なかなか掘れないね」

C：「ここの土は、固いよ」

と言いながら、一生懸命掘っていた。

うちわのグループは、水を桶に溜めることにした。

①実際に浮かべてみると笹舟の浮かべ方で、沈没する笹舟がある。

やってみてできなかった体験

②慎重に舟を浮かべる様子が見られ、バランスを図っていた。＜工夫＞

また、そのことを、一緒に遊んでいた年下の子どもたちに伝え、できない子には手伝ってあげる様子が見られた。

山に川を作るグループ

砂場に山を作り、水を運んでいた。その過程で、バケツを使って水を運んでいたC児が、じゃまになったのか、持っていた笹舟を園庭への傾斜したコンクリートの通路の上に置き、水を汲みに戻った。

①水を入れて戻ろうとした時、たまたまコンクリートに水がこぼれ笹舟が「流れる」ことを発見した。◎

これは大発見であったようで、近くで水を運んでいた男児と大騒ぎになった。＜気付き＞

②「もっと沢山水を流そう」と、次々に水を流し始めた。すると、笹舟がより速く流れた。＜気付き＞

③騒ぎを聞きつけた他の子どもたちも集まって来て、誰の舟が一番速く流れるか競争になった。＜興味の転換＞

④D男が、水が流れる先に堤防を作り、水溜りを作ることを提案した。そうすることで、流れた水が溜まって舟が上から水溜りまで長い距離流れるようになった。これは、夏休みの預かり保育中に、保育者と水溜りを作って水遊びをした時の応用であった。＜知識・工夫・発見＞

⑤発見を機に、水を流す係り、舟を離す係り、堤防を守る係りなどが自然にでき、ひとしきり遊びを楽しんだ。一緒に園庭にいて遊んでいた異年齢の子どもたちはいつもは一緒に遊びを楽しんでいるが、遠巻きに興味深そうに見ていた。

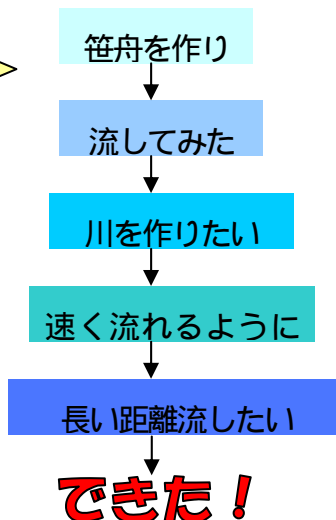
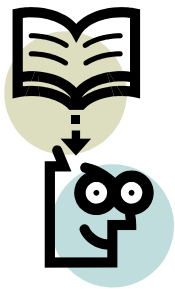
歓声があがったので、板で川を作っていた幼児の中には、水流しの方へ参加した子どももいたが、「園庭の端に行くまで川を掘る」という目標をもっていた子どもたちは、歓声を横目に、熱心に土掘りを続けていた。

次の日以降は、水流しは行われず、笹舟を沢山作って、コレクションする活動へ変化した。また、年少児に作り方を熱心に教えるようになった。

科学する心の育成

情報をきっかけに

保育者のかかわり



知識が体験を経て知恵に変わる過程

みどころ

幼児は遊びの中で、自ら目的や疑問をもち、様々な気付きや発見、考えや工夫をしながら多くの学びにつながる体験をしています。この事例も目的や展開が柔軟な取り組みの中だからこそ、子どもたちは思い思いに自分の気付いたことや考えを言葉や動きに表し、友達と活動を展開しています。中には当初の目的と違う魅力的な姿に興味に向いていますが、そうした自由観や主体性がベースにあるからこそ、子どもの思いを実現する考えや工夫は原体験として蓄積されることが期待できます。